

「戦士の憩い、^{いこ}夢のまた夢」

立処 ^{りつしょ}

真 ^{まこと}

目次

序章	マサノブ・タカヤマ	1
第一章	青春哀歌	4
第二章	蛇 ^だ 蝮 ^{かつ} の人	3 3
第三章	死に神稼業	96
第四章	サイモン ^お 墜つ	155
第五章	戦士の憩い	197
終章	再びの闇	244

序章

マサノブ・タカヤマ

時は一九九九年（平成十一年）八月二十三日の白昼。始まりは、鋭く先の尖ったその国土の形状から“アフリカの角”と呼ばれ、いつ果てるとも知れぬ内戦に苦しむ国ソマリアの首都モガディッシュ。

その地を正午に飛び立ったナイロビ行きケニア・エアアのボーイング七三七型機が、離陸後程なくしてソマリア反政府テロ集団にハイジャックされ、混乱で航路を大きく東に外れて迷走。二時間後、乗客百十五名、乗員九名を乗せたまま、燃料切れでインド洋に浮かぶ島国セイシェル沖合いに不時着水。

その際、左の主翼を海水に接触させて大きくバランスを崩し、直後に海面に激しく叩き付けられた同機は、胴体の中央部で真っ二つに切断。二十数分後に、浸水で七十メートル近い海底の藻層と化した。

悲報が世界を駆け巡り、絶望的観測が支配する中、やがて明らかとなった詳細に人々が瞠目した。激突時の凄まじいほどの衝撃に耐えて奇跡的に生き延び、自力で機外に脱出した乗客二十一名全員が、負傷した身ながら力尽きて溺れることなく、また鮫に襲われるようなこともなく、生存者リストに名を連ねたからだ。

不時着水の一部始終を、数キロ離れたセイシエルの海岸で目撃していたあまたの地元関係者や海水浴客の、極めて迅速かつ機敏な救助活動が二十一名全員の生還を可能にしたことは、不幸中の幸いであった。

因みに生存者リストに載っていた“マサノブ・タカヤマ”の名は、瀕死の重傷

を負った男性が、プラスチックの袋に密封してサハリ・ジャケットのポケットに持っていたパスポートから転記されたもので、唯一の日本人生存者と報道された。

小柄な中年のその日本人がどういう経緯で、こんな僻地のきな臭いフライトに乗り合わせたのかは、スクープを求めて色めきたった日本のマスコミはもとより、どのニュース・メディアもついで扱えずじまいに終わっている。

入院先での面会謝絶が長く続いて本人からの取材が不可能だったからのようで、また日本での関係者がどうしても見つからなかったことも関係したようだ。

その後の入院加療に費やされたナイロビでの数ヶ月間についても、本人の口から身の上話が語られることはまったくなく、また彼の安否や消息を問い合わせる者は一人としていなかったという病院関係者の談話が残されている。

第一章

青春哀歌

「高山君、ごめん。君をそういう目で見たことはないの……。私は、私はね、浅野君のことが……。分かるでしょう？」

だからこういう真似は、これつきりにしてね。お互いに嫌な思いをするだけだから……。」

狂おしいほどの恋心に耐えきれず、思い余って無我夢中で告白を果たした正信ましのぶ。今にも張り裂けそうなその胸に、グサツと止めを刺すような残酷なセリフをあつきり言い終えた富美子ふみこ。申し訳なさそうな、それでいてどこか楽しんでいるようなつかみ所のない笑みを口元に浮かべたまま、彼女はほっとしたように小走り仲間女子高生のほうに戻っていった。

あっけなく木っ端微塵に砕け散った、自分ながら実にぎこちなかった命がけの求愛の試み。女子生徒たちの笑い声を遠くに聞きながら、がらんとした昼下がりの校庭の一隅に茫然と独り立ち尽くす正信。多感な感性はずたずたに引き裂かれ、そよ吹く風に揺られてちぎれ飛んだ。

富美子が名を口にした浅野という男子生徒は、高校一年の高山正信の同級生だ。背が低く小太りで不細工な正信とは正反対の、細身で長身、そして色白で鼻筋の通

った甘いマスクの浅野は、女子生徒の羨望の的なのだ。

本人もそれを十分意識していて、自分がいかにも過ぎて飽き飽きしているかを言葉の端々に匂わせ、もてない正信たちに優越感剥き出しの目を向ける。勉強は二の次で暇さえあれば女子生徒の品定めにも忙しい、その耐え難い軽薄さゆえに、そして自らの劣等感の裏返しも絡んで、浅野は正信が内心最も嫌悪し軽蔑している男だ。

（最愛の富美子がそんな浅野に心を奪われているとは……。自分が全身全霊を傾けて恋い焦がれた聖女富美子が、そんな薄っぺらでミイハアな存在だったとは……。）拭いがたい失望感に嫉妬心も絡んで、正信の心に虚無の闇が広がった。

*

クラスは違いが同学年の富美子とは、弓道部員として部活をとにもする間柄だった。祖父の手ほどきで中学生の頃から弓術を嗜んできた正信は既に初段の腕前だったので、一年生ながら初心者を指導する役割を与えられ、富美子もその対象の一人だった。

均整がとれ肉付きがよくて愛くるしく、男好きのするタイプの富美子は、汚れを知らない澄んだ大きな瞳とほのぼのとした笑顔の印象的な、思わず声をかけたくなる女の子だった。また根は生真面目で性格はつましく家庭的であり、趣味は読書で、暇さえあれば世界文学全集を読み漁る、いわゆる文学少女でもあった。

余程弓道が性に合ったのだろう、彼女は素直に正信の指導に従って熱心に部活に

励むので、メキメキと腕も上達した。そのうちに選ばれて對抗試合にも出るようになる。正信と一緒に過ごす時間も増え、言葉を交わす機会も多くなっていた。

性に目覚めてからというもの、欲望と感受性は人並み以上の正信だったが、それだけにずっと自分の容姿には強い劣等感を抱かされてきた。だから異性関係には常に自制心が先に立ち、とりわけ好ましいと感じる異性には、自らの心を閉ざすことで精神の平静を保ってきた。後で泣くのはいつも自分の方であることが身に染みわたるので……。

富美子との出会いも然り、案の定、急速に募る彼女への慕情を、いつもの自心でおくびにも出さずになんとか過ごしてきたのは、正信としては上出来のことであつた。しかし彼に対するいつも変わらぬ明るく打ち解けた富美子の態度が、知らず知らず正信の固い殻に穴を空けていったのは、いかんともしがたい成り行きであつた。

富美子は人と話すときに近くに寄って相手の目をじっと見る癖があり、また心の底から湧いてくるくすぐるような笑い声は、少し鼻にかかつて男心を浮き立たせるのだ。彼女にとっては何気ないはずのそんな仕草が、いつしか正信を魅了して放さなくなつた。

手を伸ばせば触れられるほど近くで富美子と向き合つて、その体の温もりと弾力を思い、微かな洗い髪の香りを意識するつど、下腹部は熱く膨れ上がり、（抱きしめ

たい」という禁断の衝動に正信は激しく悩むようになる。最早彼の病いは、膏盲こうぼうに入っていた。

*

そんな思いの丈を伝え、デートを申し込んだあの日の正信の行動は、それこそ何日も何週間もろくに眠れぬ夜を過こした末の苦渋の決断だった。だから成算などまるでない、唯々この苦しみをもう終わらせたいという強い願いが動機の全てであった。(当たって砕ける……)それが偽らざる心境だった。だからうまく事が運ぶとは、到底思ってはいなかった。

だが、あそこまで屈辱的で救いのない言い様をされ、心のどこかで(もしかしたら)と、消し切れなかったはかない望みもあつけなく消し飛んで、正信はとことん打ちのめされた。人の気持ちをもいとも簡単に踏みにじって悔いる風もなかった富美子に、女性のエゴと愚かさ、酷さを見た。

「高山。お前は富美子に言い寄ったんだって？彼女が困ったといっって俺に相談に来たよ。彼女は俺に気があって、会うといつも俺の体のどこかに触れたがる、そう、触れなば落ちんといったところだ……」。

この前なんか偶然を装って、腕で彼女のあそこを擦ったんだ。驚いていたけどなんにも言わなかったぜ。まんざらでもなさそうだったなあ。ブラは着けていなくて、大きくはなかったけど、柔らかくていい感じだったよ……」。